



導入事例

群馬県済生会前橋病院

～液晶ペンタブレットの活用～ 『電子カルテと描画アプリの連携 により気軽に手書きを実現』

整形外科 代表部長 後藤 渉 氏
整形外科 部 長 長谷川 仁 氏
広報・情報課 係長 内田 貴誉志 氏

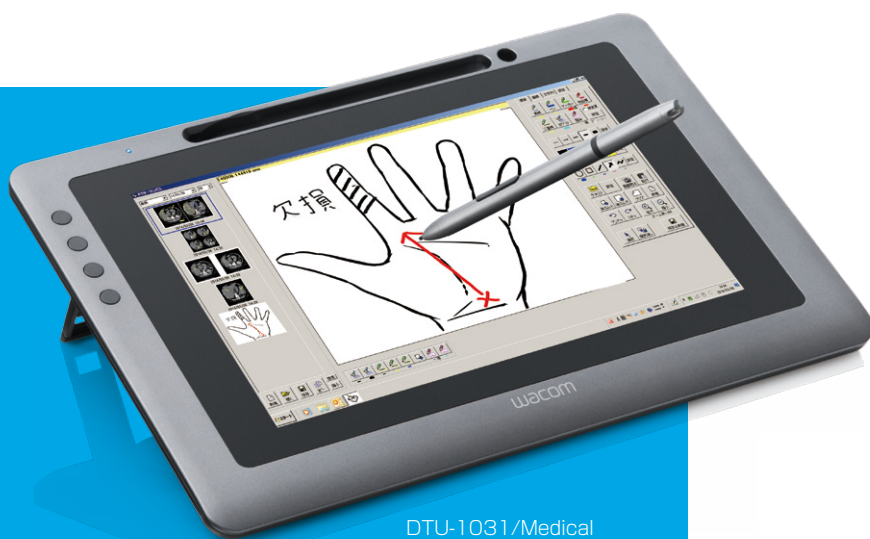
群馬県前橋市で、中核病院の一つとして地域医療の一端を担っている群馬県済生会前橋病院。2013年度に全館に電子カルテが導入された際に、電子カルテに描画記事を残すため整形外科で採用されたのが、ワコム液晶ペンタブレット『DTU-1031/Medical』と描画ソフトの『ドクターカンバス』です。その導入に至る経緯と使用状況についてお伺いしました。



✓電子カルテと連携した描画アプリの導入

群馬県済生会前橋病院で、電子カルテが全面導入されたのは、2013年度のこと。その数年前から導入に向けての準備が進められていました。その際に、整形外科の医師からある要望がありました。それは、従来紙カルテに手書きしていたシエーマ（絵や図解）を電子カルテでも書きこめる環境にして欲しいというものでした。その経緯について、電子カルテ導入を推進した広報・情報課の内田貴誉志係長は、次のように話します。

「電子カルテシステムは、NECの『MegaOakHR』を導入しました。標準仕様のままでもマウスによる描画は可能でしたが、従来行っていたカルテの所見記事として細かい絵を描く作業はマウスでは難しいと判断しました。そこで医師にも納得してもらえるデバイスを検討する中で、ペンと同じ手書き感を再現できるワコムの『DTU-1031/Medical』を描画デバイスとして採用しました。」



DTU-1031/Medical

ただし、導入に至るまでにはさらなるハードルが待ち受けていたと、内田係長は振り返ります。

「当初はペンタブレットの機能を生かす描画ソフトウェア『ドクターカンバス』が、『MegaOakHR』と連携しておらず、それぞれが独立したアプリケーションとしてしか利用できませんでした。しかし、これらをシームレスに連携させるべくシステムの開発を進めていただいた結果、電子カルテ上でスムーズに『ドクターカンバス』が起動し、書いたシエーマを容易に電子カルテ内に取り込めるようになりました。」

電子カルテの導入担当者として、もっとも危惧したのが「電子カルテにしたら、紙カルテに比べてシエーマや手術記録の描画がチープになったね」と言われてしまうことだったそうです。しかし、現在は不満の声も上がらず、順調に運用されています。

✓書き味が良くコンパクトなのが導入の決め手

電子カルテ導入において、整形外科内部で医師やスタッフの意見を取りまとめる役割を担ったのが、整形外科部長の長谷川仁医師です。カルテを電子化することで、情報共有による効率アップなど数々の利点があることは理解が進んでいましたが、整形外科ならではの問題に苦慮していたといいます。

「整形外科では、カルテ記事を入力するときにキーボードによるテキスト情報だけでは、すべての対応が難しいと考えていました。特に図やシエーマなど言葉では表現しにくいことを補完するため



に、従来同様に電子カルテにシェーマを書き込みたいのですが、マウスでは思うような絵は書けないのではないかとこの声当初からありました。」

「電子カルテにシェーマを書き込むデバイスとして、液晶ペンタブレットの導入を広報・情報課から提案され、それを受けて数機種の比較テストを行いました。その結果『DTU-1031/Medical』の導入に踏み切った」とのことです。

「選定にあたり、他社製品も含めいくつか試してみましたが、ワコムの製品は他のものよりもずいぶん書き易く、反応もいいなと最初から好印象でした。また診察テーブルに置くことができるコンパクトさや、紙と同じように手を添えて楽に書けるのも、選定理由でした。」

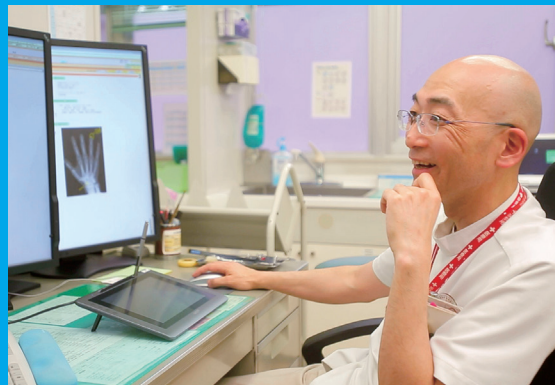
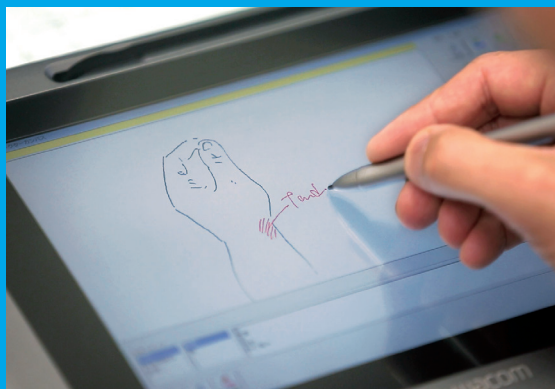
導入して5ヶ月、長谷川医師は液晶ペンタブレットならではの使い方に利便性を感じていると言います。

「整形外科では局所の微妙な表現が重要です。単にここが痛いというだけではなく、腫れて赤味がどの程度まで広がっているのか、色の変化の具合、例えば赤いのか紫なのか、それが病状の判断の基準となることもあります。患部の境界を示す場合は濃淡をつけることで、微妙な変化が分かりやすくなります。紙カルテでも色鉛筆などを使っていましたが、液晶ペンタブレットになってからは、より頻繁に色分けをするようになりました。」

導入から日が浅く、まだまだ使いこなす域までには至っていないと謙遜される長谷川医師ですが、ワコム担当者からの情報提供にヒントを得て新たな使い方を広げている最中と、笑いながら話されました。

✓液晶ペンタブレットの活用で作業効率を大幅に改善

手指切断再接着術のエキスパートとして知られるのが、整形外科代表部長の後藤渉医師です。後藤医師は紙カルテの時から、患部の詳細な絵をカルテ記事に添えていたとのこと。



「僕は手の整形が専門なので、手の細かい箇所の記録を残すためには絵が必須です。記事を書く場合、文書でだらだらと書くよりも、絵で残して一目でわかるような記録が一番望ましいと考え、今までもそうしてきました。絵はなくてはならないものです。」と話される後藤医師は、導入した『DTU-1031/Medical』について、満足できる性能だとおっしゃいます。

「実は過去にワコムのペンタブレットを使ったことがあり、最初から液晶ペンタブレットの導入を希望していました。改めて使ってみて、特にストレスは感じないですね。かなり理想に近づいたと思います。手書き感を残しつつ電子カルテに記載できることが良いですね。」

当初、液晶ペンタブレットの導入にあたって意図されていたのが、紙カルテの環境と同等の作業環境を構築することでした。ところが書き味だけではなく、電子カルテと液晶ペンタブレットがもたらした利便性により、作業効率の大幅な改善にも繋がったと説明されます。

「手術中に撮った写真やレントゲン画像を取り込み、そこへ手書きで直接メモを書き込めます。また紙カルテの時は、必要があれば手書きの絵をスキャンしていましたが、それなりに時間がかかっていました。液晶ペンタブレットでは、一連の作業が紙カルテに比べてはるかに短時間で終わります。これまで手術記録などは、手術からだいぶ先になって完成なんてこともありましたが、今はその日のうちに書き終えてしまいますね。それと、シェーマや図をコピー＆ペーストで簡単に手術記録等に転用できるので、非常に便利です。」と後藤医師は電子カルテと描画アプリの連携の有効性を語って下さいました。

現在は整形外科の診察室と病棟のみで導入されていますが、他の診療科でも需要があるため、更なる拡充も視野に入れているそうです。



社会福祉法人 恩賜財団 済生会支部 群馬県済生会前橋病院
<http://www.maebashi.saiseikai.or.jp/>

群馬県前橋市上新田町 564-1

済生会は、明治天皇の済生勅語を受け恩賜財団として誕生した社会福祉法人。その群馬県支部として1943年に済生会前橋診療所が開設されたのが、群馬県済生会前橋病院のルーツ。1974年に現在の場所に移転。済生の精神に基づく無料低額診療などの社会福祉事業から、白血病の造血幹細胞移植などの最先端医療にいたるまで幅広く手がけ、現在は327床のベッドを持つ中核病院として地域医療を担っています。また整形外科では、手指切断再接着術で北関東エリア随一の実績を残し、遠方からの患者さんも多く訪れます。